

佳作賞

「用意するにこした
ことはない」

『igne a』5号

岩代明子氏

岩代明子（いわしろ・あきこ）

一九七四年一月七日 豊中市生まれ 三島郡島本町在住。
九八年から八年間、大阪文学学校に在籍。○一年より仲
間と合評会『tisso』を発足し、○七年同人誌『i
gnea』を発行。『樹林』掲載の小説「トカゲ」が第二六回大阪文学学校
賞、および『文學界』○六年下半年期同人雑誌優秀作に選
ばれる。また同人誌『igne a』掲載の「用意するに
こしたことはない」が季刊文科に転載される。

現在、大阪文学学校講師。tisso同人。

「用意するにこしたことはない」

二〇一一年五月、私は妹が暮らす福島市に車で向かって
いた。磐梯山近くのサービスイリアで飲み物や周辺地図を
購入した。直前に調べた放射性物質への対応策を思い出し
ながら、見上げると、鮮やかに五月の青い空が覗いていた。
私は「智恵子抄」についての妹からのメールを思い出した。
福島島の美しい自然についての言葉が多かった。妹は果物の
交配に関する研究をしていて、去年の秋、ドイツから技術
を学びにきた大学院生と出会い、付き合い始めた。そして
三月、妹から、妊娠の知らせがあったすぐあとに、地震が
起きた。十二日の朝、ようやく妹と電話が繋がった。無
事がわかった安堵は、午後のニュースによってくだかれた。
ドイツ人の恋人がずっと妹のそばにいてくれていた。私か
らは大阪に避難しておいでと何度かメールをし、電話もし
た。妹は産休に入ったらと言っていたが、どうやら早めの
退職を決心したようだった。ところが今度はドイツへ渡る
ことになりそうという知らせがきた。私はそれで、連休を
利用し、福島に向かうことにしたのだ。

磐梯山と阿多々羅山のいただきの間を通り抜けるように
山を越え、私は無事、福島市内に入る。迎えに現れた妹は
マスクをつけていた。お土産が「蓬萊のアイスクャンデー

とどろソース」とときき、妹は笑いを弾けさせた。

妹の部屋で私たちはお好み焼きを焼きながら、近況を語
った。私が妹に彼は今日、どうしてるの、と聞くと、職探
しのためにドイツに帰っているという返事だった。私は部屋で「ベビーニット」という編み物のハウツー本
を見つめる。私は編み物が得意だった亡き母の姿を思い浮
かべながら、ページをめくった。パステルカラーのカーデ
イガン、靴下、白い帽子……。妹が、作りたくなっただ
けど、やっぱ向いてないと苦笑いする。母の編み物好きを
受け継いだのは私のほうだった。私も妹も、母が生きてた
ら、編み物で色々作ってくれただろうと目を合わせた。「いつドイツに発つん？」と、私が聞くと、来月という返
事だった。出産までは大阪にとすすめるが、ドイツの恋人
が反対しているという。—— チェルノブイリの事故のあとのソビエト政府と同じ
って、彼が言ってる。ドイツに移ろうって。私は妹からもらったメールの言葉を思い出しながら、何
かを言いたくて、けれど言葉はどうしても浮かばなかった。
棚の上に置かれた紙袋から編み棒が突き出ているのが目に入
る。手を伸ばして覗き込むと、編みかけの毛糸が目に入
った。それ、あげる。持って帰って。表情のない声で妹が
言った。気がつくとも、妹は両手で自分自身を抱きしめてい
た。その両腕のなかにお腹があった。以前には見たことの

ない仕草だった。

シャワーを浴び、パジャマに着替えると、妹が冷えた缶
ビールを出してくれた。「あんたは飲まへんの？」と、私
が言うと、「放射能だけで十分」と妹が答え、「ごめん」と
付け足す。私たちは沈黙し、しかし私は母の亡くなる前の
姿を思い浮かべた。癌であることは結局告げなかったが、
それでも薄々わかっていたのか、亡くなる前は「用意する
にこしたことはないから」と口にして、姉妹二人きりにな
ったあとのことをあれこれと言いつた。二人で助け合
いなさいと繰り返し、人間は一人だと脆いから、と念を押
した。「用意するにこしたことはない」と母の思い出を口
にすると、妹も母の思い出をたどり、母の編んだ品物を送
ってほしいと頼む。

翌朝、別れ際、私が「帰つといで」と言うのに、妹はご
めん、と泣きじゃくる。妹は、三月十一日から何日間か、
そばにいたんはあの人やったから、いったんは彼について
いくべきやっと思うと、返事をする。

大阪に戻った私は、母の形見の品を取り出す。そして母
が亡くなるまで愛用していたマントをほどこきはじめる。私
は、十二月のドイツに生まれてくる赤ん坊のことを考え、
どれだけ用意しても、どうしようもないこともあると、母
は多分知っていたのだろう、と感じる。それでも生まれて
くる子供のために、私は毛糸を巻き取り始める。